

やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

13. スペインとの不平等条約改正にこぎつけた外交官安達峰一郎の力量

●峰一郎が取り組んだ条約改正

明治になって日本外交最大の課題は、江戸幕府が幕末に欧米諸国から武力を背景にして締結させられた不平等条約を改正することでした。明治26年7月、峰一郎はイタリアに赴任し、最初に取り組んだのは、ポルトガルやスペインとの交渉でした。両国にはしばしば出張し、交渉に当たったといえます。同29年の1月にイタリア臨時代理公使に任じられるとともに、条約改正に成功し、翌年1月に新条約が調印されました。

次に改正に当たったのはフランスでした。明治41年にフランス大使館参事官として赴任し、交渉は難航し時間がかかりましたが、得意のフランス語を駆使して見事に成功させ、この時も臨時代理公使となって条約に調印しました。この成功には時の首相桂太郎も、峰一郎の実力に驚いたそうです。その後ベルギーとの改正も成功させるなど、峰一郎の努力によって条約改正が進み、日本も欧米諸国のような“一等国”としての地位を築いていきました。

●峰一郎が受けた賜金

時は前後しますが、峰一郎がイタリア在勤になった翌年に日清戦争が起こり、次の年に下関条約が結ばれて戦争は終結しました。資料を見ると、明治29年に『日清戦争の功により金500円を賜る』とあります。“日清戦争の功”が何であるかは不明ですが、おそらく峰一郎の国際法の知識が活かされ、下関条約の作成などに関わったのではないかと考えられます。

さらに明治33年に清国で欧米列国の清国侵略に対する民衆の抵抗運動だった義和団事件が起こりました。欧米列国はこれを武力で鎮圧し、清国に巨額の賠償金などが盛り込まれた議定書を認めさせて終局しました。この時も峰一郎は、『義和団事件における功績により金1,000円を賜る』とあり、同じ理由だと思われます。その後も何度か賜金を受領しているようです。

●フランス万博での大奮闘

ヨーロッパの大国フランスが各国に呼びかけ、明治33年(1900年)に臨時パリ万国博覧会を開

催することになりました。日本政府もそれに応え、万博を活用して日本の存在をヨーロッパに広く知らしめようとします。そこでフランスに精通している峰一郎を万博の事務官に命じ、フランスに4年も前から在籍させ、191名の職員などを派遣して準備万端に整えさせました。

日本は法隆寺の金堂の模型を建てて古美術品を展示したのを始め、美術工芸品や工業製品など2万6,460点を展示して好評を博しました。さらに峰一郎は、伊藤博文首相や西園寺公望首相代理などの案内役を務めました。また、当時ロンドンに留学中だった夏目漱石も万博を見るためパリに訪れ、峰一郎のことを訪ねています。

万博の大成功によって、その功績が認められ、明治33年から35年にかけて数々の叙勲などを受けました。それらをあげると、正六位、勲五等に叙され、瑞宝章、双光旭日章をあいついで受章、高等官四等、公使館一等書記官に昇進しました。また、フランスからも勲章をもらっています。



フランスで長男太郎と一緒に

●久しぶりの帰郷

明治36年5月20日に帰国することが許され、日本での長期休暇を与えられ、なつかしい山辺に鏡子夫人、長男太郎、次女万里子とともに帰郷しました。久々に生家で両親や長女功子と一緒に過ごし、玉虫沼や小鳥海山に家族みんなで行きかけたりしました。また、札幌農学校を卒業し、福島県の荊宿家の婿養子になった弟の幸治郎、早稲田大学を出て山形日報社長として活躍した弟の隆治郎、山辺小学校の教師であった妹の“きみ”や“じゅん”とも久しぶりに再会したかもしれません。

その後、38年にアメリカのポーツマスで行われた日露講和会議に派遣されるまで、しばらく国内で外務省の仕事に従事しました。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤継雄